

カッティング動作を伴う競技におけるシューズの適正選択についての研究

A Study of footwear select for sports with cutting movement

1K05A156

中田 絵理子

指導教員

主査 太田章先生

副査 渡部賢一先生

【緒言】

今年開催された北京オリンピックにおいて女子レスリングはアテネオリンピックに続いて全階級メダルを獲得し、世間からも注目を集めている。レスリング競技は、人類最古のスポーツである一方、女子レスリングのオリンピック種目導入は、前回のアテネオリンピックからとオリンピックの歴史は浅い。

華々しい活躍の裏には、競技人口の少なさや練習環境の不備などの問題が存在する。私は、16年の間選手生活を続けている。その中で、女子レスリング選手として女子選手と男子選手の違いを感じることもある。また、自分自身数多く経験した外傷・障害、そして日頃から聞く部員や周りのレスリング選手の外傷・障害の悩み等で、レスリングの競技における外傷・障害に自然と興味を持った。日頃感じる競技上での男女差、レスリング選手の外傷・障害の経験、女子レスリング選手の女性としての悩み、またレスリングの指導法についても、自ら関わる女子レスリングの現状と問題点を考察したい。

【方法】

被験者は、2008年北京オリンピック、世界女子選手権の強化合宿に参加した全日本強化メンバーを中心にアンケート調査及びインタビュー方式で回答を得た。さらに、外傷・障害の男女の差を調査するために、早稲田大学レスリング部に所属する男子部員にアンケート調査を行った。

【結果・考察】

男性と女性の体格や体力の差からレスリング選手における外傷の性差を予測していたが、アンケート調査によると大きな差が認められなかった。しかし、男子選手でも女子選手なりに柔軟性に優れている者や男女幼少期からレスリングの競技を開始している者に限って類似している傾向にあった。男子選手との体力や体格の差を女子選手全員が感じていると答えた。その違いから、レスリング競技における技術や展開には男女差があるといえる。女子レスリングの現状について、男性指導者は、女性のからだについての理解は十分でない。女子選手も男性指導者に女性としての月経問題を打ち明けているのは、非常に少ない。女子選手のコンディションを把握するためにも、男性指導者は女性のからだについて自ら理解しようと努力しなければならない。また、女子選手も勇気を出して男性指導者に月経やコンディションを伝えなければならない。私の経験上、選手も指導者も互いに遠慮しては、良い信頼関係が生まれないと感じている。

【結論】

日本の女子レスリングは男性指導者で、女性のからだに関して知識が十分ではない状態で自らのレスリング経験を生かし、自己流の指導方法を行っている指導者が多い。現在、日本女子レスリングは世界のトップであるため、この指導方法が最善であると信じている傾向にある。しかし、日本の女性スポーツ全体を通して、女性のからだに関して知識のある男性指導者が少なく、指導方法を含め女子選手の環境が最善であるとは、必

ずしも言えないのが現状である。「日本人選手は、勤勉で我慢強い」それを武器に戦ってきたが、日本の男子レスリングをみても、昔のように世界での活躍はほとんどない。また、環境については日本のトップである女子レスリング選手を中心としたアンケート調査を行ったため、アンケート結果には偏りがあると感じた。しかし、私を含め、若手の選手や上位でない女子レスリング選手は、決して満足でない環境にあるのではないだろうか。

近年、外国人女子レスリング選手が急速に力を付け、ジュニア世代では、外国人相手に勝てな

くなっているのが現状である。外国人選手と日本女子選手の差は確実に縮まっているといえる。日本女子レスリングは、世界で活躍する強いシニア世代の女子選手に目を向けがちだが、競技人口の多いキッズ世代の女子レスリング選手から視野を広げるべきだと感じる。女子レスリングの人口がいつまでも極端なピラミッド形式でなく、どの世代にも楽しまれ、現役を続ける選手を増やすためにも、女性のからだを理解し、日本女子レスリング選手全世代の現状と問題点にしっかり解決すべきと感じている。